

峰尾碧

（平成三十年十二月号）

人なべて声紋持てば試し弾くいづれの古器も我がこゑに鳴る
試奏室猫の赤児を抱くやうに誰のものでもなき提琴を弾く
弦上に虧盈見んとすラ・フォルアは月の変容とふ説離れず
来し方のこゑの記憶か遠処より古提琴に倍音降り来
薄かりし提琴のあざ醜まさり秘かに恃みし愉悦越えたり
f字孔のぞけば人無き回廊に十九世紀の月光降り
可聴域狭まりくるが古提琴いよよ添ひ来て音鳴り始む
晴れやかに透明に鳴る新作を酔ゆき葡萄か違ふと斥く



●作者の言葉

ヴァイオリニストのイ
ツァーク・パールマンが、ど
の楽器を弾いてもその人本来
の音は一生変わらないと言っ

た。ヴァイオリンはその人だ
けの声紋のある声なのだ。きつ
と短歌も同じだと思う。二百
歳近いヴァイオリンの内部を
覗くと、もうくろずんで読め

ない「パノラマ」の銘がある筈だ。下手だけれ
どいつも自分の時間のパノラマに向かう気
持ちで弾く。つましいヴァイオリンも何十
年も弾いている内によく鳴るようになった。
黒岩さんにヴァイオリンの歌を選んで戴
きとても嬉しい。ありがとうございました。

●選者の言葉

昨年七月号は創刊一二〇年記念号で通常
の作品欄はなかったたのでそれを除き、八月
号〜本年六月号で私が特選に選ばせて頂い
たのは、計三七人。そのうち複数回選んだ
のは、佐佐木頼綱、佐世弘重、峰尾碧、永
田千奈、田川喜美子、花美月の六人で、た
またま私のところに多く回って来たとい
うこともあるのだが、峰尾作は三度であった。

年間選者賞を選ぶに当たっては、右に挙
げた方々の作に加え、十月号の梅原ひろみ
作なども含め悩んだが、結果としては上に
掲げたように、十二月号の峰尾作とした。

その主役は、十九世紀に作られた古いバ
イオリンなのだが、その姿、音、それが奏
でようとする曲など、八首いづれも完成度
の高い作品であった。